

今月から文化面で美術コラム「視線」をスタートさせます。期間は2008年1月から1年間。ギャラリーや私設美術館の館長

らに、1カ月ごとに沖縄のアートシーンや自身が取り組んでいる芸術・文化活動などについて書き継いでまいります。



昨年十一月に開館した県立の美術館、「沖縄県立博物館・美術館」の名称があやしい。館名はその性格を示すのが当然。「・」美術館は博物館の「付属」の位置付けで受け止められても仕方がない。財政上の理由で、両館を一つに束ねる県教育委員会関係者の美術見識が疑わしい。「美術」を軽んじた対応と指摘されてもやむを得ない。高校や中学の学校現場で美術や音楽の時間が削減されているとの声も聞こえて久しいが、今回の県立美術館建設のあり方は、県教育関係者の美術認識の現れと言えよう。

内外の美術館専門家を招へいした「県立美術館アドバイザー

おきなわ美術コラム

視線

上原誠勇

ザー会議」の解散劇を、開館後の新聞記事で知った。県民の期待を裏切るような内容だ。形がいつ化した県文化行政内実を知る思いだった。専門家の意見が反映されず、県民の歴史に残る大きな損失である。このなほ崩しの行政のあり方が、私たちの「主体的表現の場」の最後の砦とも言える美術館に及んだことは全く残念でならない。

開館記念展「沖縄文化の軌跡1872-2007」を多くの県民が観たと思う。建設前に策定された「沖縄県立現代美術館」の基本理念に近い展示内容であった。同展の企画内容からすれば、近代の始まり一八七二年にタイムスリップして、足を進めていけば現在にたどり着く順序立てが考えられる。しかし、今展では、意識的に今日の沖縄の現状に抗う美術家たちの現代

美術館学芸員の意地

美術のコンテンツポラリー作品で迎え入れ、観る者に強いインパクトを与えた。「場」の歴史と現状を強く意識・反映させた作品群を導入し、近代の黎明期まで誘い込む企てである。そこには時代と併走し「活動する美術館」の方向性が読み取れた。行政の手荒い処遇にも屈せず、名を「・」美術館に格下げされた専門学芸員の意地をみる思いであった。

「凶録の不手際や、開催イベント、年間企画予定の告知の不備など、指定管理者の運営の不十分さに不安と課題を抱えた美術館班のスタートだ。内部関係者の努力によって、「基本計画」に従い、失われた独立機関「沖縄県立現代美術館」を取り戻すべく、ねばり強く再構築していくことを期待してやまない。

(画廊沖縄主宰)

うえはら・せいゆう 1947年、南風原町生まれ。「青い海」出版社勤務を経て、81年企画画廊「画

廊沖縄」を設立。90年から季刊「The Gallery Voice」を発行。12日から「栗国久直展」を開催中。